

はじめに

西秋 良宏

本書は2013年に刊行した『ホモ・サピエンスと旧人—旧石器考古学からみた交替劇』¹⁾の続編です。旧人には、よく知られたネアンデルタール人のほか、近年定義されたデニソワ人など様々な集団がいたようですが、ここでは、ネアンデルタール人に焦点をあてています。彼らは20年以上前のヨーロッパに登場し、ユーラシア大陸西部から中部にかけて広く拡散しました。ところが、約4万年前頃、急速に姿を消したことが知られています。アフリカを出た解剖学的現代人、つまりわれわれホモ・サピエンスと、ある地域では交替、別の地域では交雑し吸収されながら、いなくなったようです。私たちは、そのプロセスを『交替劇』と名付け、学際的な観点から詳細を探ろうという研究プロジェクトを進めています²⁾。ここで述べるのは考古学的な成果の一部です。

考古学的には大きく分けて二つの課題があります。一つは、交替や交雑、吸収の歴史的経緯を具体的な遺跡、遺物の証拠で跡づけること。もう一つは、その原因を解釈することです。

前者の仕事には、解剖学的現生人類がいつ、どんなルートをとってアフリカから出たのか、そして旧大陸各地へどのように広がり先住集団と置き換わっていったのか。それらについて整理し、交替劇の枠組みを提示することが含まれます。2013年の前巻では、この点についての研究の現状をサーベイしました。

一方、本書では、二つ目の、交替劇の原因を追求する取り組みの一端について報告します。このプロジェクトでは作業仮説として、学習能力、学習行動の違いを原因の候補としてかかっています。ホモ・サピエンスとネアンデルタールという二つの人類集団の間では学習のあり方が違っていたのではないかと、それが原因で技術や文化に格差が生じ、結果的に交替が起こったのではないかとというモデルです。これは作業仮説ですから、具体的な検証を重ね修正しつつ、最終的な仮説提示にむかうことになります。本書では、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの学習について考古学を中心とした各種の証拠を点検しています。

第I部では両集団の学習がどのように違うのかを検討する際、遺跡や遺物という点でどんな証拠が利用できるのかを提示します。旧石器時代遺跡で最も普遍的な遺物、すなわち石器は学習の産物そのものです。石器文化の中身や変化のパターンを調べることで当時の集団の学習の様態にアプローチすることができます。また、保存の良い遺跡では、そこで行われた個人レベルでの学習行動を具体的に復元できることもあります。旧人と新人について、そのような事例を紹介、検討します。第II部で報告するのは、民族考古学から見た学習です。何万年も前の人類が、どのようにして道具作りを学んでいたかを考えるには、やはり現在の人々の行動を参照して、類推の根拠を作る作業が不可欠です。つまり、現在の証拠を鏡として過去の学習を推察する研究例を述べて

いきます。そして、第Ⅲ部では、「認知、身体、学習」と題して、ホモ・サピエンスとネアンデルタールの学習に影響を与えたかも知れない生物学的違いについて考察します。交雑があったとは言え、形態学的、遺伝学的に異なる集団に分類されているのですから、両者の間には行動や生き方において生得的な違いがあったと推察されます。それについて整理するものです。

具体的な話に入っていく前に一つ、言葉の定義について確認しておきます。学習とはどのようなものか。さまざまな立場からさまざまな定義が可能かも知れませんが、広辞苑の定義が常識的なところかと思います。「学習とは学び習うこと」。そして、「過去の経験の上に立って新しい知識や技術を習得すること。技能・知識を意識的に習得すること。広義には、精神・身体の後天的な発達をいう」とあります。また、「過去の心理的・行動的な経験によって、行動の仕方が発展すること」ともあります。いずれにしても大事なことは、過去の経験に基づいて知識を得たり自分の行動を変えたりするということです。過去の経験にも幾つかあって、試行錯誤によって自分で経験する場合と、他人の行動などを模倣して、そこで経験して他者から学ぶ場合という、少なくとも二つに分類できるのだらうと考えられます。

本書ではそれらを各々、**個体学習**と**社会学習**と呼んでいます。学習というと、よく、習うといいますが、教えてもらうことばかりを想起する方がいらっしゃるかもしれませんが、新しいものを創造するということも学習です。それを**個体学習**と呼ぶことにしますのでご留意お願いします。

本書に寄稿しているのは**交替劇プロジェクト考古班**のメンバーが大半ですが、班外の方も含まれています。金子守恵、中園聡両氏、また、文化人類学班から寄稿いただきました山内太郎氏には、改めて御礼申し上げる次第です。また、本書は過去2年間に幾度となく開催された研究会、シンポジウム等における講演録に基づいて書き起こされたものです。それぞれの機会において、実りあるコメントをいただいた出席者の方々にも、お名前を逐一あげることはできませんが、厚く御礼申し上げる次第です。

- 1) 西秋良宏編 (2013) ホモ・サピエンスと旧人—旧石器考古学からみた交替劇。六一書房、東京。
- 2) <http://www.koutaigeki.org/>

目次

はじめに	西秋良宏	i
例言		
I 学習の先史考古学		
初期ホモ・サピエンスの学習行動—アフリカと西アジアの考古記録に基づく考察—	門脇誠二	3
ヨーロッパ旧人遺跡にみる学習の証拠—石器製作における技量差と子どもの石器—	佐野勝宏	19
ネアンデルタール人の利き腕と学習行動		
—ドイツ、ブーレン遺跡出土中期旧石器時代削器の分析より—	オラフ・イエリス	28
翠鳥園遺跡 <small>すいちようえん</small> と豊成叶林遺跡 <small>とよしげかのうばやし</small> にみる新人の石器製作の学習行動	高橋章司	44
II 学習の民族考古学		
弓矢学習の民族考古学—パプア・ニューギニア狩猟採集社会にみる先史考古学的示唆—	西秋良宏	59
民族考古学からみた狩猟具の製作と学習—カメルーン南東部の槍調査成果から—	石井龍太	75
土器の製作と学習への民族考古学的アプローチ		
—エチオピアにおける土器のかたちと動作連鎖—	金子守恵	90
「交替劇」後のホモ・サピエンスと土器	中園 聡	104
III 認知, 身体, 学習		
認知考古学から見た新人・旧人の学習	松本直子	123
ネアンデルタール人の運動能力は推定できるか?	日暮泰男	135
ヒトとネアンデルタールの生活史と学習	山内太郎	150
ネアンデルタール人の成長と学習—子供期仮説をめぐる—	西秋良宏	163
旧人・新人の学習行動をめぐる諸問題—あとがきにかえて—	西秋良宏	175
編者略歴, 執筆者一覧		